

令和 5 年度 穎明館高等学校 卒業式 式辞

穎明館第 37 期生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。保護者の皆様、心より、お慶びお祝い申し上げます。

本日は、学園本部から理事長の堀越正道先生、副理事長の堀越由美子先生、堀越高等学校校長の掛本寿雄先生をお迎えし、ご列席の保護者・教職員・在校生の皆様とともに、卒業式を挙げることを誠にうれしく思います。

卒業生の皆さん、皆さんは穎明館での学校生活 6 年間、実によく頑張りました。皆さんは中学 1 年、2 年と順調にスタートしたところで、コロナパンデミックに見舞われました。コロナ禍の中で、求められた我慢や工夫。それでも皆さんは決して嘆くことなく、前向きに学校生活を送っていました。高校 2 年生の時には、関西への宿泊体験学習を 37 期生全員の力で、見事に成功させました。奈良公園で鹿と戯れていた姿、雨の京都、USJ での満面の笑み……私には今でも鮮明に思い出されます。新大阪駅での解散式で、コロナ禍の月日に思いが募り、言葉を失った私の姿に、皆さんはざわつくことなく、聞く姿勢を崩さなかった。37 期生皆さんの優しさに触れました。改めて感謝申し上げたい。ありがとう。

「感謝を伝えること」については、校長 HR 行脚の時にも話しましたね。卒業という節目に、皆さんも、お世話になった方々への感謝の気持ちを、言葉にしてきちんと伝えてください。

さて、穎明館の教育目標は、「国際社会に羽ばたく真のリーダーの育成」です。そこで今日は卒業のはなむけとして、一つの言葉を贈りたいと思います。

“Think globally ,act locally” (地球規模で考え、足元から行動しよう)。Glocal という造語があるくらいに有名ですが、環境問題を考える上で重要な標語です。ただ、これは環境問題のためだけの言葉や考え方ではないと私は思っています。SDGs の実践を考えてもらえればわかりやすいでしょう。穎明館で学んできた皆さんは、もうおわかりだと思いますが、人間が生きるのは仲間のためです。仲間の支えを受けて仲間にそれを返すためです。そのことが、お互いに本当の幸い、幸せを与えるのです。

Think globally（地球規模で考えよう）ということでは、今日、よく言われるように人類が直面している課題の多くには、正解がありません。感染症対応をはじめ、地球温暖化、人口爆発、ロシアのウクライナ侵攻やパレスチナ問題にみられるような紛争の数々。国内でも少子高齢化や経済的な格差、何よりも能登地震災害からの復旧復興等々、解決策を考える時、正解のない課題が山積しています。こうした正解のない課題に対して、常に視野を広げて、想像力をもって、自分で考え、自分で解決策を打ち出す高い知性を養い続けてほしいと思います。

そして Act locally（足元から行動しよう）ということでは、私自身のことを少しお話しします。私は東京都府中市に、もう 30 年ほど住んでいます。縁あって、武蔵国総社である大國魂神社の例大祭、「くらやみ祭り」のお手伝いを続けてきました。幼いころからお祭りが好きだったこともあります。地域に根付いた日本の伝統を守りたいという気持ちもあったからでしょう。私は裏方で、微力ではありますが、町内会の方々と協力して祭りに関わってきました。祭りも高齢化が進み、私は青年、まだまだ若い方の部類に入ります。力仕事にも頑張っています。ただ、この「くらやみ祭り」も、ここ 3 年間はコロナ禍で神輿渡御ができませんでした。「今年こそは」の熱い思いを関係の方々とともに抱き、準備を進め、4 年ぶりの神輿渡御は、大成功を収めました。「くらやみ祭り」に関わるたびに、“Think globally ,act locally” を実感させられます。私にとって、本業である穎明館での教育活動は、当然のことながら全力投球です。ただ、本業とは別に、こういったボランティアでの地域貢献が、私自身の人生に彩を与えてくれているようにも思えます。

卒業生の皆さん、“Think globally ,act locally”（地球規模で考え、足元から行動しよう）。広い視野に立つためには、常に勉強が必要です。何よりも大学では専門知をしっかりと身につける努力をしてください。一方で、実践は常に目の前にあります。大学での新たな人間関係の中で、自分自身のやりがい、生きがいをしっかりと見出し、仲間のために貢献する気概も忘れずにもちつづけてほしい。そして専門や本業を生かすためにも、足元の世界は一つに限る必要はありません。私の場合は教育界と地域社会ですが、皆さんのこれからの世界が、幾重にも広がりを持つことも期待しています。

式辞の結びは、創立者堀越克明先生のお言葉です。『堀越学園創立 100 周年記念誌』にも掲載されている、「余白の美」という私の好きな一節を紹介します。

色紙には筆の触れられていない部分、余白が大胆に残されている。そして、描かれたものと余白とのバランスは常に考えられている。

無駄でいいのである。いや無駄だからこそ価値があるのである。諸君がもし、腹の足しにならないものには、いっさいお金を使わないようにしたら、その生活はどんなものになるか。無駄遣いの楽しさと、その後悔とがあってお金の貴重さも理解される。色紙の余白が活かされてものが見えるのである。

文科系の受験生にとって、理科系の学力は美しい余白を構成する。青春の日々を、汗まみれになってボールを追ったその時間が、人生という時間と空間の中にあって、かけがえのない余白として、その人格を浮き立たせるであろう。

卒業生の皆さん、「余白の美」——私には創立者の言葉がこう聞こえます。「人生には無駄なものは何一つない。37 期生の皆さんが穎明館で過ごした時間も空間も、これから歩む人生の一瞬一瞬、一場面一場面も、美しい余白とともに輝きを増していくに違いない」と。

誇り高き穎明館 37 期生の皆さん、卒業おめでとう。皆さんの人生に幸多かれ。

以上、令和 5 年度穎明館高等学校卒業式式辞といたします。